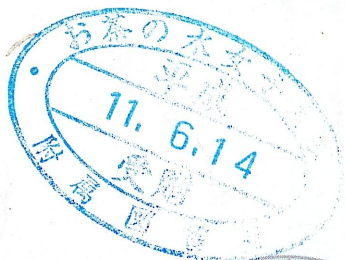


N24
1
98[2]

家庭—保育所—幼稚園

幼児の教育



'99 7



附属図書館

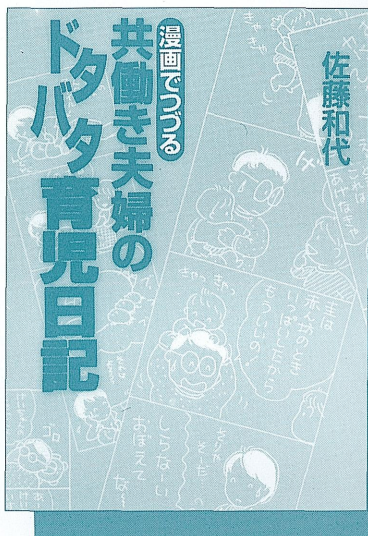
第98巻 第7号 日本幼稚園協

漫画でつづる

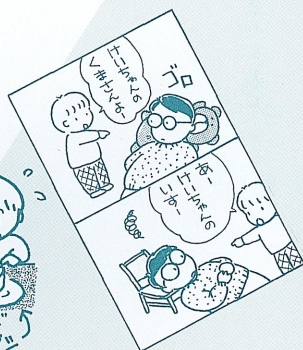
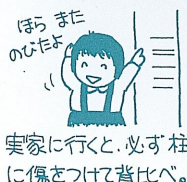
最新刊

「幼児の教育」連載の
単行本化!

共働き夫婦の ドタバタ育児日記



個人的な育児にまつわるできごとが、子育て奮闘中のお母さん方の笑いと共感をよぶのびのび育児日記。保育者にも、育児中の母親がどんなことに喜び、不安を感じるのかがわかり、母親対応のコツがつかめる本として活用できます。



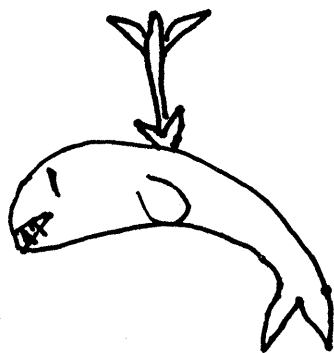
佐藤和代 著

B6変型判 208頁 定価：本体1,200円+税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第98巻 第7号



幼児の教育 目次

— 第九十八巻 第七号 —

© 1999
日本幼稚園協会

巻頭言 保育者の暖かさ	千羽喜代子	(4)
子どものつぶやきが意味するもの	小山 節子	(7)
子ども同士の育ち合い・教師同士の育ち合い	竹田 好美	(10)
図書紹介 ダニエル・J・ウオルシュ、M・エリザベス・グラウエ著		
『文脈の中での子どもの研究―理論、方法、倫理』	津守 真	(16)
子ども時代と私(16) 過去が教えてくれるもの	野田 幸江	(26)



「児童の世紀」を振り返る―その十四―……………本田 和子…(31)

子どものいる暮らし―男・夫・父 私の言い分……………中島 隆…(40)

歴史の中の保育に学ぶ(三) 橋詰せみ郎の家なき幼稚園から……………福元真由美…(44)

特撮・アニメ今昔―『機動戦士ガンダム』シリーズ考……………山本 政人…(53)

子どもの本から 「いのち」ってなんだろう……………仲 明子…(60)

表紙絵／北村 俊道

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「刀白慢」

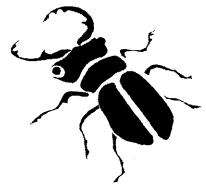
編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子

編集部／仲 明子



保育者の暖かさ

千羽喜代子



女学生の頃、「理想の女性像」という宿題を与えられたとき、聖書の創世記の中のリベカを挙げたことを記憶している。

この箇所を要約しよう。

主人アブラハムの命を受けた一人のしもべは、アブラハムの子イサクの嫁探しの旅に出かけ、ある願いをもって井戸の側に伏せていたとき、娘り

ベカが水がめを肩にのせ、泉に降りて水がめを満たし、上がってきた。しもべは走り寄って、「お願いです。あなたの水がめの水を少し飲ませてください」と乞う。するとリベカは、「お飲みください」と言つて、急いで水がめを自分の手に取りおろして、しもべに飲ませ、飲ませ終った後、「あなたのらくだにもみな飲ませ終るまで、わた

しは水をくみましよう」と、再び水をくみに井戸に走って行き、すべてのらくだのために水をくんだのである。その間しもべは、主が彼の旅を祝福されるか、どうかを知ろうと、黙ってリベカを見つめていた、という物語である。

有名な箇所であるので読者の多くは記憶しておられる方もいられると思うが、水を乞うたしもべだけでなく、長旅をしてきたであろうらくだの渴きをも察して、十頭のらくだのために井戸から水をくみ上げるのである。女性にとってはかなりの重労働である。

リベカのやさしい心情に共感をおぼえたのであったが、何故か今回のテーマを「保育者の暖かさ」と題したとき、この箇所が再び思い出されたのである。

親の養育態度を云々するとき、一九五〇年代から一九六〇年代のはじめにかけて、まず親の態度を識別・測定し、つぎに、それを子どもの行動の

特徴と関連づけようとする試みに多くの努力が向けられた。

例えば、R・シアーズらは、親の養育態度に二つの次元があること、すなわち、その第一の次元は、「暖かさ―冷たさ」であり、第二の次元は、「許容性―拘束性」であることを報告している。

この研究結果は、保育者と子どもとの関係にもあてはまるのではないかと考えていたが、一九九八年度の修士論文(大妻女子大学)のテーマに伊藤香苗が共感性との関連で取り上げた。いずれ発表の機会が得られると思うが、暖かさを「受容」、「共感」、「愛情」の包括概念と考え、まず、暖かさは何によってとらえることができるかを参与観察によって、エピソード記録を収集したのである。

この結果の詳細は省略するが、研究の始めに設定した、暖かさは人格特性としてとらえることができるのではないかとの浅はかな仮説を立証することができなかった。むしろ、次の理由によって

保育者と子どもとの関係性のなかで、保育者自身が作り出すものではないかとの結論に至ったのである。

その理由は、①暖かさを感じる行為は、乳幼児の気持ちや感じ方や言葉の受容及び体験の共有を通じての関わりにおいてとらえられること、②行為以外の要素としては、時間的経過の中での子ども理解、子どもの内面及び背景の把握、子どもに対する成長の喜び、成長への期待、見守る保育者の存在、これらの諸要素が関与していることを明らかにした。

O・F・ボルノウは、教育を支えるものを教育的雰囲気という概念で言おうとしている。それは第一に情感的であること、第二に教育する者と教育される者を包む包括的な気分であることと説明している。ボルノウ研究者のお叱りを受けるかもしれないが、「暖かさ」は、この教育的雰囲気に近い概念ではないかとも考えられる。

極めて荒い考え方であるが、暖かさが人格特性の一要素としてよりも、それは保育者と子どもとの関係性の中で、保育者自身が創り出していくものであるという結果に、何か救われた思いがしたのである。

親から一時の間ではあるが離れて生活する保育施設の間における乳児や幼児たちの寄りどころとなるものは、保育者との間にもし出される暖かさの共感、心情的な関係である。

この保育者の暖かさを乳幼児たちは、どのような状況のもとに、どのようなかたちでとらえているのだろうか。

それは保育者の暖かさだけでなく親の暖かさにおいても然りである。

(大妻女子大学)

子どものつぐやきが意味するもの

小山 節子

現職を退き幼稚園新規採用教員の研修指導員として私が体験し、気付かされたことは少なくともなかった。その中で子どもの行動は常に新鮮であり興味深いものであったの言うまでもない。

クラスに入る際、子ども達のどうして来たのかの素朴な疑問に戸惑いながらも咄嗟に元氣な皆と遊びたいと応えたのはあまり的確ではなかった。月に一回の訪問では遊び仲間になれないのはあたりまえで

ある。それでも子どもは優しい。食事時になると数人が競って声をかけてくれ私の座席が決められる。

友達や周囲に自ら溶け込めない子どもがほっと安心する瞬間を私自身が味わった気分にはさせられたのであるから不思議である。保育の場ではよく「子どもの目線で」とか「子どもと共感する」と言うが子どもの一員になったつもりで実体験できる機会を与えられたことは有り難い。

ある幼稚園の五歳児、昼食時で担任と当番は給食室へ行っている。私の隣のW子が少し離れたグループのM子に、ナプキンや箸箱を触らないで手を膝にして待たないといけないと何回か指図したらM子は泣き出した。するとそのグループの女兒四人がM子を含めテーブル上で握手し、W子とは遊ばないと密かに誓いあっている。Y子は「そんなに言わなくてもいいんじゃないの。友達なんだから」ときっぱり言い切る。W子は表情をこわ張らせ、だめって決めているの（担任との約束）とひかない。私はやや心配になりグループに近付き理由を聞いた。

「遊びにいられてあげないって決めたの。私（Y子）もW子ちゃんにいじめられたけれど私はいじめたことがないの。私も泣きたくなかったけれど我慢したの。先生（担任）に言うといじめられる。先生（小山）、W子ちゃんに言うておいてね」。

私はそれまでもW子の言動が気にかかった事もあってW子にこの際伝えようと思った。五人が悲し

んでいること、優しく教えてあげると良かったこと、強く言うてごめんねって言ったら？ 等。

すると、小さな声でW子「私だって、強く言われる、ママに。ママは頭も叩く」、私はすぐかける言葉に窮した。当惑した私が叩くところはおりこうさんの頭じゃなくてお尻よね、等と言ったものだからW子やグループの男児たちが笑い出し、突然、空気が軽くなった。間もなく給食が配膳され始め、ふと注意して見るとW子はY子やM子達と行き交いながら「ごめんね」と言っている。

私は無理やり謝らせようと強引ではなかったか、解決を子どもに委ねるべきではなかったか、なりゆ



きをもう少し見守っていたらどうであったか、担任
だったらどうしたであろうか、等自問自答し始めた
自分に気付いたがもう遅い。全く試行錯誤の境地で
ある。

十分にも満たない間の出来事であったが、私の心
にかかったのはW子に対する母親のかかわり方に問
題はないかという点である。子どもの言葉をそのま
ま鵜呑みにして、日常的に行われているかのように
錯覚し決め付けることは避けなければならないが、
事実を語っている場合もあるからである。このこと
は当然担任に話した上で、より一層観察していつて
欲しいものと願った。

それにしても、ランチタイムのリラックスした雰
囲気の中で表してくれる子どももの会話には真実味が
含まれ興味深い。食事しながらであるから、傍らに
私がいようと気にせず自由におしゃべりを楽しんで
いる。つかの間ではあるが私も仲間の一員に加えさ

せてもらっている喜びに浸る。わたしは……あのね
……と話を聞いてもらうことがなんと嬉しく楽しい
ひとときであろう。

話題は父母や家族の事、飼っている小動物につい
て等無論遊びを含め多様性に富んでいる。

そこには生活臭が滲み出ることもあり、さながら
大人の井戸端会議の様相を呈していたりする。

子どものすばらしいところは友達の話に耳を傾
け、ありのままを受入れ、難しく追及しない点にあ
ると言える。

こんなにささやかな瞬間からも、私たちは子ども
をとりまく様々な状況を知る事によって幼児理解を
深める手掛かりを得て、保育の方向を見いだせるか
もしれないと考える。

(茨城県在住)

子ども同士の育ち合い・ 教師同士の育ち合い

竹田 好美

私が三月まで勤務していた幼稚園には、三歳児、四歳児、五歳児がそれぞれ一クラスずつありました。また、高層住宅の一階部分に位置し、園庭がどのクラスから見渡せるという環境の中にあります。これらの状況をよりよい方向で保育に

生かそうと、「異年齢の友達と共に育ち合う指導の工夫」というテーマのもと、園内研究を進めてきました。私にとっては、特に子ども同士が育ち合う姿が印象的でした。その育ち合いの姿についてお話ししようと思います。

なぜ異年齢なのか？

子ども同士がかかわる様子を記録に取る時、新たな発見がありました。同年齢の友達に強く自分を主張する子が、年下の子にはやさしく思いやりをもってかかわる姿、運動遊びの苦手な子が、年下の子と一緒に遊ぶ中で運動に興味をもっていく姿、年上の子が遊んでいる様子に刺激を受けて、やってみようと挑戦する姿などです。同年齢では表わしにくいことが年下なら表わしやすいのだろうか、また、年上の子の遊びに刺激を受けて、新たな意欲をかきたてられるのだろうか、つまりお互いに影響を与え合っているのではないだろうかと考えました。

また、幼稚園生活の中で、一人一人が自分を生き生きと表現するためには、幼稚園の中に自分の居場所があるということが大切だと思います。子

どもの人数が減ってきている今、個人差が大きければ大きいほど、自分のクラスの中だけでは自分の居場所となる得意な遊びや気の合う友達が見つけられない子がでてくることも予想できます。しかし、自分のクラスだけでなく、同学年の他のクラス、そして単学級であれば、異年齢のクラスへとかかわりの可能性を広げてあげること、そのような子どもたちの居場所を確保することができるとは思いません。

そこで、異年齢とのかかわりに注目して、それを活発に促すことで、多様な友達との出会いを



意味あるものとし、幼児一人一人が自分を生き生きと表現しながら、充実した園生活を送ることができるよう指導を工夫することが私達の課題だと考えました。

かけっこの場面から

運動会の練習が盛んに行われていた十月上旬のことです。四歳児のかけっこはコーンを回る折り返しのもの、三歳児のかけっこはその距離の半分を走り抜けるものでした。

四歳児が園庭でかけっこの練習を始めました。その様子を見ていた三歳児が「ほくもやりたいな」とつぶやいたのを聞き逃さず、「やりたいって言ってみようよ」と促しました。傍にいた他の三歳児も一緒に「入れて」とかけっこに加わりました。三歳児は四歳児担任に名前を呼ばれると、四歳児と同じように、「ハイ」と嬉しそうに手

を挙げてから走りました。四歳児とは体力差がありました。自分が四歳児と同じコースを走り切ったことで満足していたようです。

そこに五歳児が入ってきました。数回三歳児と一緒に走りましたが、必ず大差がつきます。物足りなさを感じていたのでしょうか、スタートラインにハンディをつけることを考えだしました。四歳児と一緒に、競うことで十分に自分の力を発揮して走ることができたようです。かけっこはこの後も人数が増え、更に盛り上がりました。

この事例には、三学年が同じ場所で生活を始めてから約半年の間、教師が異年齢の幼児同士のかわりを意味のあるものにしていこうと援助してきた成果が少しあらわれているように思います。まず、どの学年の幼児も自分が「面白そう」「やってみたい」と思った活動に、積極的・主体的に参加していることです。日頃から教師側も学

年にとらわれず、どの幼児も受け入れるという姿を子どもたちに見せてきた結果ではないでしょうか。また、五歳児がハンディをつけることを考えたことには、年上としての自信や思いやりを感じ取りました。異年齢とかかわる中で育ったことだと思います。私は、この事例から、教師が自分の学年の幼児だけでなく、他学級の幼児ともかわりをもつことによって、幼児が自分を自由に表現し、自己発揮しやすくなるという大切なことを学びました。

他学年の友達を作ることから

学級の人数が少なくなってくると、自分の学級には気の合う友達が見つかりづらいことがあります。そんな時、学年が違ってても気の合う友達ができたら人とかかわりに幅ができて楽しい園生活が送れるのではないかと考えました。少しでもか

かわるきっかけをと、四歳児、五歳児がペアと なって一緒に遊べる機会を作りにしました。

五歳児M児は自分から積極的に動くことは少ないが、何事も丁寧で、相手の動きをよく気遣う姿が見られました。しかし、学級の中では仲良しの友達に従うことが多く、自分の行動に自信がもてないようでした。四歳児F児は遊びの経験が不足しているためか不安感が強く、物事に取り組みと きもゆっくりしていました。この二人なら気持ち が合うのではないかと考え、遊ぶためのきっかけ 作りとして、誕生会のおやつの際に隣で食べた り、遠足の時手をつないだりと交流を繰り返して きました。

十一月に幼稚園の隣の公園に、四・五歳児が一 緒に遊びに行く機会がありました。幼稚園の門の 所で待ち合わせをするとM児とF児は自分たちか ら自然に手をつなぎました。公園に行く道でもM

児はF児の歩くペースに合わせて気遣う姿も見られました。公園に着くとこの二人を含めた数人でかくれんぼが始まりました。かくれんぼが終わっても二人は離れようとはせず、手をつないで公園を歩き始めました。二人とも花が大好きで花を見たり摘んだりしている姿が見られました。後で母親から、M児が「公園ではFちゃんと一緒に遊ぶんだ。楽しみだな」と話していたということを聞きました。

この事例からは、子どもたちが自分と気の合う友達を求めている姿が読み取れるのではないかと思います。学級の中での居場所が見つからず自信がもてない幼児が幼稚園生活を生き生きと送れるはずがありません。教師が意図的にペアを組み合わせましたが、友達を探している幼児にとって気の合う子や共感し合える相手が他の学級にということに気付くことは幼稚園生活の楽しみを広げる



ことになると思います。そして、友達を見つけていく意欲、友達をつくる希望を感じ取らせることができ、幼稚園以降の生活も豊かになるのではないのでしょうか。また、ペアを作る時に、両学級の教師がそれぞれの幼児の実態をよく把握した上で、それぞれの幼児が互いに自分のよさを発揮できる相手と組み合わせることが、この二人の自己充実につながったと考えます。私は、学年にとらわれず幼稚園全体の幼児のことを知ろうとする教師の意識と、幼児をよく理解した上で、かかわりを深めていく援助を進めていくことの大切さを学

びました。

子どもたちの育ち合いの中で

二事例しかお話しできませんでしたが、まだまだたくさんの子どもの育ち合いがありました。子ども同士がかがわることでお互いに刺激を与え合い、また、積極的に教えたり教わろうとする姿も見られるようになりました。そして、自分の興味をもった遊びにじっくりと取り組める環境も整い、遊びが豊かになっていきました。また、異年齢のかかわりを豊かにしていくことで、遊びが五歳児から四歳児へ、四歳児から三歳児へと伝わり「遊びの循環性」が生まれるのではないかと考えています。このことは今後も更に調べていきたいと思っています。

最後に、子ども同士が育ち合う素晴らしさに気

付かされたと同時に、教師同士も子どもと一緒に育ち合っていることも再認識しました。三学年の幼児に対応することで、幼児の発達をより一人一人に即して理解しようとする柔軟な見方をするようになりました。また、教師同士の連携が欠かせません。幼児のとらえ方を話し合ったり、活動の選択や展開の方法について意見を交わし合ったりすることがお互いの保育観を磨くことにつながったと思います。考えてみれば、幼児対教師も異年齢、教師同士も異年齢、いろいろな年齢の人とかわることの大切さ、そして素晴らしさを気付かせてくれた園内研究でした。これからも、新たな出会いを求めて、保育を進めていこうと思います。

(東京都中央区立日本橋幼稚園)

図書紹介

ダニエル・J・ウォルシュ、M・エリザベス・グラウエ著

『文脈の中での子どもの研究—理論、方法、倫理』

津守 真

著者のダニエル・ウォルシュは心理学者であり、幼児教育の研究者として実証心理学とは違う方法論を模索している。この書物はその過程で生れた労作であり、一九九七年の出版である。米国の心理学で、近年質的な研究がなされていることを私は聞いていたが、

この書物はその中に位置付けられるだろう。私は、昨年秋に兵庫教育大学付属幼稚園にいったとき、たまたま著者と知り合い、この書物を頂いた。そして今回日本保育学会で教育対談をすることとなったので、この書物を紹介したい。

研究は発見することである

保育研究は、この世界を子どもにとって住みよい場所にするためのものであることを著者は最初に強調する。これは私共に共通の保育研究の大前提である。

子どもにとってよりよい場所とはどういう所かは、人によつて考えが異なるだろう。著者は次のように言う。「この世界をより良い場所に行っていると信じる人は、ひとりよがりになり、傲慢になりやすい。研究者は世界をよりよくする道を発見しようと挑戦する。『発見』の反対は『発見しない』ということではなく、『あなたのために良いものを作り上げた（makeup）と思う』ことである」。

研究というと一般法則をつくることという考えがわれわれの中に根深くある。そうではなくて、子どもをよく見ることから、子どもを発見するのが研究である。

子どものために良いプログラムを作り

上げたという虚構が今世紀後半を支配してきた。著者は、子どもの考えに忠実になって子どもを発見しようとし、その過程を明らかにしようとしている。著者は言う、「それには労力と費用がかかる。われわれは出掛けて行き、見聞きし、浸つてさわり、何度もそれを繰り返し返さねばならぬ。フィールド（保育現場）で生み出されたままの素材から記録をつくるプロセス自体を問いなおさねばならない。その結果の知識は不確定であり、変化するものである。それでよいのだ。知識をつくるのは人間のなすわざである。それは決して確実にはならない」。これは私もいつも考えていることである。「ひとつの逸話記録を取り出すのに、な



んでそんなに時間をかけるのか。アメリカの文化は特に『する』ことに価値をおく文化である。そこでは何かを形として作り上げること (makeup) が高く評価される。発見されるものは、人々が期待するとおりのものとは限らない。発見は、文化がすでに知っていることに反するかもしれない」「何故子どもを研究するのか。答えは、発見することである。発見し続けよ。

われわれが発見しなければ、だれかが虚構を作り上げる。実際、だれかがすでに作り上げ、それが子どもの生活、子供観、政策決定に力をもってきた。発見は、支配のイメージに挑戦する」。これはなかなか名言である。私はそのとおりだと思う。

この書物は、幼児に焦点をあてている。前半で理論に力を注ぎ、後半で、具体例を引いて記録と解釈と記述の方法について丁寧述べて行く。理論編では、第一章 対象としての子ども 第二章 解釈の科学 第三章 文脈としての理論 第四章 倫理 第五章 文

脈としての研究者の役割について論じる。後半は具体例を取り上げてゆく。第六章 データを生み出す 第七章 記録を構成する 第八章 文脈の中で解釈する 第九章 文脈として記述する 第十章 結論、と記録を文書の報告にするまでの過程を丁寧追う。

この書物を紹介するにあたり、私は後半の具体例を主にしようと思う。

レディネスに関する観察

著者は幼稚園から小学校一年生へのレディネスについて長年関心をもっていた。「レディネスの観念がどのようにして構成されるに至ったか、幼稚園から小学校への移行にあたって末端の地域の学校の学区の中でそれがどのように伝わってきたかに興味を抱いてきた」。「子どもは生徒として構成される」と著者は何度も述べる。レディネスを語るとき、子どもは「子ども」ではなくて「生徒」になる。子どもを生徒としてしか見

ない。

著者たちは、毎週S小学校の付設幼稚園と一年生のクラスを訪問した。年間を通してクラスに参加し、観察記録をとった。その整理をふくめて観察の方法に後半が費やされる。とくにひとりの子どもJの資料が取り上げられる。この書物は保育研究者を念頭において、この部分に多くの紙数を割いている。繁雑ではあるが、書物の順を追って紹介しよう。

幼稚園第一日 九月三日観察記録（米国では新学年は九月にはじまる）

「ベルがなる前に、教師ミセスWは園庭に顔を出してクラスをむかえる。『神経質な親子がいますね』と言いながらドアの外で子どもを迎える。子どもたちは列をつくって教室に入る。ひとりずつ入るように注意する。ミセスWが『かばんの中に何か入っていますか』と言うと、子どもたちはカバンを調べ、先生に見せる。必要のあるものを取り出し、カバンをコートかけ

にかける。ある子どもたちはカバンをもって教室に入り、うろろ歩きまわる。教師はコートかけにおくうに言う。大部分の子どもたちは絨毯のところ座るが、かなりの子どもが立ったままおしゃべりをして、おもちゃをいじったりしている。Jは悲しそうな表情で、教師にくつついている。『Jさん、あなたは私の隣に座っていいですよ。――さあ、皆さん、座りましょう。皆さん、いいですか』（先生は皆が気持ちよくしているかどうかを見る）。

かなり形式張った第一日のように見えるが、よくみるとそれほどでもない。

第一日の記録につづいて、九月二四日の絵をかく場面でのJの未成熟の行動、二月一三日の数を数える場面、五月一四日の泣く場面のなまの記録が記される。これらはなかなか読むのが面倒である。

私も、保育の研究会に行くと、なまの記録をしばしば渡されるが、読む気を起すまでに時間がかかる。こ

の著者も、それでは研究物として不十分と感じている。もつと子どもが見えてくる記録の提示の仕方がないかと苦勞している。どうすればよいか。

次のステップがメモである。表面を超えて根底にある状況をみるのがメモの目的である。

メモ

「Jは、レディネスの点で従来から問題視される特性をすべて備えている。Jは早生まれで体も小さい。彼は最初の日から泣いた。しかし他にも泣く子はたくさんいる。彼は特定の子どもTとの関係で泣く。Tはいじめっこで、私もTと話していると泣きたくなることがある。Jは仲間の子たちの活動に参加してかなり上手にやる。数や文字もできる。仲間と折り合える」。他の人達がJはいつも泣いていると言うのだがそれは何なのかと著者は疑問をもつ。「Jの周囲の人達がJをどうみているかを理解できたなら役立っだろう。良い

幼稚園児の基準は何なのか」。メモは個人としてのJを記している。Jを新しい角度から理解することを試みたいと考え、そのために、Jの教育体験に重要なふたりの人、母親と教師のインタビューをする。「幼稚園と一年生への期待が、未成熟と言われるJへの見方の舞台を設定している。Jについてのある決定をするのに、この期待が人々に力をもっている」。

要するにその保育現場をよく知っている人の感想をまじえた解説であろう。

教師ミセスWの期待

「最初の頃は子どもは自由遊びがだいじだ。しかし次第に私は『お仕事』を導入する。一週に三つか四つの仕事に責任をもたせる。そして仕事と遊びのバランスをとることを学ばせる。仕事ばかりする子どもには自由遊びを、遊びばかりする子どもには仕事を。私は選択を重視する。しかし一日中ではない。先生がしなさ

いという時間と子どもが自分で選ぶ時間と」。

アメリカでも日本でもよく似た状況があることがわかる。

メモ

「教師の期待は同僚によって粹づけられている。成熟のパロメーターのひとつは、子どもが幼稚園で適切な仕事を選ぶ能力である。適切さの基準は先生が選んだ仕事を子どもがするかどうということである。幼稚園教師は一年生の先生の同僚から、新入学児が十分に成熟していないまま学校に入ってくることをしばしば聞かされている。幼稚園教師としての評価は、生徒が一年生のカリキュラムをこなせるかどうかである。この基準に合わない子どもは遅れていると見なされる。それは上級学年の基準によってきめられ、子どものニードから生み出されるのではない」。

上の段階の方が優先するのも、いずれとも同じであ

る。中学生がわるいことをするのは、幼稚園のせいだという論議もこれと同じだろう。こうして乳幼児期はいつも後回しにされる。

子どもへのインタビューと他の子どもとグループで行われた。

子ども自身の考えを聞けるといい。この書物の子どもたちは、ある程度言語で表現している。それはグループでの自然の会話の中で示される。著者は、ピアジェの会話法による研究に懐疑的である。ピアジェはそこから一般法則を作り出そうとしているので、著者はそれとは違う立場をとっている。ただし、子どもの考えに耳を傾けようとしている。遊びの時間と仕事の時間をコントロールしてきめるのはだれかを子どもに尋ねてい



る。Jは繰り返し、自分は遊びたいのに、遊びが中断されて仕事の時間になることを訴える。子どもが自分が決めたのではない仕事を、進んでやるかどうかによって評価がなされる。Jはこの基準に対して反抗している。興味深いことは、Jは教師の枠づけをそのまま自分の基準として取り入れていることである。これらの資料からリーディング（読解）を行う。

リーディング1

教師はJの像を古典的なレイネスの問題をもつ子どもとして構成している。成熟度の観点から見れば、Jは生まれ月でも社会情緒面でもレイネスのない子どもである。教師とコミュニティの観念がJの見方を枠づけている。

リーディング2

解釈的読み方―Jの解釈にだれかがかかわっている

か。彼等はどうな役割を与えられているか。

母親の役割は子どもの学校を最善のものとするために小児科医や専門家、先生からインフォメーションを集めることである。教師は子どもが学校での成績をあげるのを助ける役割である。子どもは幼稚園のカリキュラムを遂行する社会情緒的レイネスによって定義づけられる。

勉強の構造―教師は自分で仕事を選ぶ子どもを成熟しているとみなし、Jはそれに達していないと考えている。Jは学校は面白くないと考える。

参加の構造―親たちはカリキュラムについて語るが、Jの母親はそのネットワークの中心にはいなかった。彼女はほかの親たちほどにはそれに従うプレッシャーは経験していなかった。

コミュニティのメンバーによって課せられるゴールと目標―この学校の評価は成績が良くなることである。平均Bでは十分でない。

これらのことを考えてくると、なまの観察記録では不十分である。伝えたい部分に焦点をあてて、観察記録を書き直すことが要請される。著者は、ヴィニエツト形式を提唱する。

これは逸話記録に近いが、これまで述べてきた手続きを経て、実際に忠実に、しかも文学的に表現する記録形式である。

ヴィニエツト (vignettes)

第一日の配慮―(先の第一日九月三日の記録を書き直したものの)

「ウイスコンシンの気持ちの良い夏の朝である。ミセスWの幼稚園第一日、教室の窓から太陽が射し込んでいた。ミセスWは机の上の書類のページをめくりながら時計を見て、それから窓の外を見た。園庭で遊ぶ子どもたちの声が一杯に聞こえていた。彼女はドアに向かって歩き子どもたちを向かえた。神経質になってい

る子どもたちと親たちがいますねとドアから外に出ながら言った。ベルが鳴り、子どもたちはきめられたように並び、教室に入った。幼児たちはとても小さく見えたが、ゆつくりと親から離れた。あるものは大きく笑い、あるものは心配そうな顔をして。――ミセスWがじゆうたんのところに子どもたちを集め、みんながまるく座った。おしゃべりしている子どもたちもいたし、手当たり次第に触っている子もいた。Jはグループからはなれて立ち、ミセスWの影のように後ろにさがっていた。――」。

このヴィニエツトでは、Jがクラスからはなれて立っていたこと、ミセスWは第一日の必要に答えていたこと、Jが泣くことについて示されている。このヴィニエツトは観察記録にかなり近い。見えたことに限定され、推論から生れる深部はまだ見えていない。ヴィニエツトは、書き手の想像力と、統合力を必要としている。その点では、フィクションであり、だれか

に何かを伝える性格をもつ。それは読み手を創造的に全体的理解をもつてフィールドに連れて行く。次のヴィニエツトはこの点をもつとよく示すであろう。

「Jは積み木のコーナーで、彼が作った高いビルディングを得意になって見ていた。三つの塔と、橋がふたつと動物小屋ができていた。いままでに作ったものなかで一番うまくできたと思っている。彼はほかのものは何も目に入っていなかった。ミセスWが片付けの時間ですよといったとき、彼は積み木のコーナーにとんでいった。彼は朝起きたときからこれを作ろうと考えて幼稚園に来たのだった。彼は自分一人で積み木ができることに満足した。突然他の子が来て塔をこわし、橋はつぶれた。Jは泣き声を出した。涙が流れ、『せんせい』と言って動かなくなった。先生は部屋の向こう側で他の子どもたちと『お仕事』をしていたが、Jの泣き声にそちらを見た。『今週Jは毎日積み木ばかりしている。そしてお仕事をしていない。こん

なことでは一年生になったらどうするだろう。彼がしたいのは遊びばかりだ。』またJの泣き声が聞こえた。『なんてことだ。これでは一年生の先生ともうまくやっていけないだろう』。

このヴィニエツトは著者と読者をJの文脈に連れて行く。

「積み木をすることが彼のお仕事だった。彼はそれを誇りに思い、母親は家庭でそれを奨励していた。彼はこんなに素敵なものをつくれたのは成長のしるしと思つた。先生の見方はそれと対照的だった。教師はJが積み木コーナーを選んだのは未成熟のしるしと解釈した。彼女はJが仕事よりも遊びを選んだことに苛立つた。教師にとつては泣くことはミルクをこぼすことに等しかった。成熟した子どもだったらもう一度積み木をつくるか、あるいはお仕事のコーナーに行つたらう。著者として私はいくつもの資料源からアイディアをひきだし、行為者の他の経験から明らかかな物語を

織り成す。先生は丁の積み木を未成熟のしるしと見て、小学校にゆくレディネスができていないと考えたのである」。

教育界で常識になっている『レディネス』という語が、この先生の見方を妨げていたのだった。ヴィニエットは読者に統合的なインフォメーションを与え、解釈を具体化する。ヴィニエットは物語の力の故に力をもつ。それは意味をもった体験を伝える。それは科学的と同時に文学的である。

私はかつて一九七〇年頃に本田和子さんが私共の「観察研究」で、「水曜日のうた」と名付けて観察記録の報告をされたことを思い起こした。

こうしてこの書物は、観察を科学的研究として位置付けながら、ヴィニエットという文学的とも言える読者を意識した記録形式に至る過程を丁寧に記載している。限られた紙面で難解だったかもしれないが、図書紹介とする。

M.Elizabeth Graue&Daniel J.Walsh

“Studying Children In Context

—Theories, Methods, and Ethics”

Sage Publication 1997



過去が教えてくれるもの



野田 幸江

子どものことを学び、子どもとのかかわりを仕事とする様になって、自分の過去を重ね合わせることによって、その時の子どもの気持を理解したいと思ったことも一度や二度ではなかった。しかし、それはいつも満足すべき結果を得ていない。不思議と思いつい出せないである。断片的に色々な事実を思い出すこ

とは出来るのだが、その時の自分が、その事実をどう受けとめ、どう感じたかと思いつい出そうとしても、それはまったく闇の中なのである。何も感じていなかったはずはないのに。あまり感じたり、考えたりする事のない子どもであったのか、それとも忘れる事の得意な子どもであったのか。嫌な事のみ多く記

憶を無意識の世界に追いやつてしまう様な生活だったとも思えないのに。

しかし、女学生（現在の中学生）になった頃から
の記憶は比較的鮮明である。

女子校時代の記憶は、セーラー服の上から真白な割烹着を着て、校舎の内外を掃除している自分の姿を思い浮かべる事から始まる。当時大人のもののであった割烹着を着ることによって、大人の仲間入りをしたという気恥しい様な、それでいてどこか誇らしげだった気持を今もはっきりと思い出す。それと同時に、そこには腕時計をした時、筆箱の中に万年筆を入れた時のこと等、明らかに小学生とは違う自



分を意識することの出来る現実があった。今の子ども達は生活の中のどんな変化に、それを感じているのであろう。

やがて烈しさを増した戦争は、私達の生活を一変させた。当時二年生であった私達は農耕動員という名目で、秋田へのクラスあげての疎開が決まった。「柳行李一個だけの荷物と共に」の出発であった。

いよいよ出発の日、母は、もうその頃貴重な貴重なものとなっていた小麦粉、小豆、砂糖を使って饅頭を作り持たせてくれた。大切な大切な饅頭であった。勿体なくて友達にあげるところか、自分でもすぐには食べられなかった。やがて秋田到着を目前に、ようやく心を決めて一口、口に入れた時、口一杯に酸っぱさが広がった。その時の気持をどんな言葉で表現したら良いのか、言葉がない。それ以前にも、それ以後にも、何か困った事が起った時、特に母に助けを求めようとした記憶も、母が良き相談相

手だったという記憶もあまりない。

しかし時々ふつとこのお饅頭の事を思い出し、何ともいえない暖かさに包まれた自分の存在を実感することがある。せっかくの母の思いを無にしてしまったという悔恨が一層その実感を強め、持続させてくれているのかも知れない。

秋田では、お寺での合宿であった。そこでの生活の大部分は、来たるべき冬にそなえての食料、主として山菜の確保であった。籠を背負い、わらじをはいて歩く片道二、三時間の山道はつらかった。

そしてある日、目的地にたどり着き山の中へと散る前に、先生からの注意があった。それは、蕨は開いたものとはならないこと。今日は一人○g（記憶なし）とする事。とれた者から休憩、とれなければ目標を達成するまでは帰れない、というものであった。その時はそれ程大変な事とも思わなかったが、いざとりに始めると、それは大変な作業であることがわ

かった。段々に○gというノルマが重くのしかかった。

「とれなかったら、どうしよう」。一人二人と束ねた蕨を持って行く者が増えていく。「よーし」という先生の声が聞こえて来る。どうしよう、どうしようという不安とあせりの中で、私が思いついた事は、とつてはいけないといわれた既に開き切っている蕨をとり、中の方にかくして束を作ることであった。何としても重さを確保しなければならなかったからである。先生が気付かれていたかどうか、わからない。しかし、無事にノルマは達成された。

この記憶もある種のホロ苦さを持って、今も鮮明



である。先生にしてみれば、何が何でも確保しなければならぬ冬の食料であったのかも知れない。また、ややもすれば真剣さの足りない私達に喝を入れ励ますための一言であったのかも知れない。しかし、親元を遠く離れ、人里離れた山の中で私のやった事は、先生の思わくとは裏腹に現実をごまかすことであつた。いけない事をしてでも自分の身を守ろうすることであつた。そこには頑張つて欲しいという教師の願いとは、まったく異なる生徒の反応があつたというわけである。

かつて保育者養成に携わつていた時、私は学生によくこの体験を話した。励ますつもりの一言が、こ



まかす行為を生んでしまうこともある事実を。今にして思えば、格好の教材を与えてくれたことに感謝しなければならぬのかも知れないが、その先生も今はもういない。

十二、三歳の女学生の集まりとはいえ、そこには当然いじめもあつた。仲間はずれ程度のものであつたが、他のグループでも同じ様な事があつたかどうか定かではないが、私が属していたグループには、誰を仲間はずれにするかを決めるリーダーがいた。その友はそれ程存在感のある人物ではなかつたが、不思議と影響力を持つ人物であつた。「あのひとしやべつてはダメ」という一言で遊び仲間に入れて貰えなかつたり、声をかけて貰えなかつたり、ヒソヒソ話の側を通ると急にそれが止んだり。いわゆる意地悪をされるのである。今、思えばたわいのないものであつたのかも知れないが昼も夜も一緒、夕方になれば家族のもとに帰れるということもない状

況下では、自分がその標的になった時は、唯々悲しく、じっと耐えていた事を思い出す。が、救いがあったのは、長くても一、二か月で何となくグループへの復帰が認められたことである。

そして、しばらくの平和の後、新たな標的に向っての動きが起こる。自分が仲間はずれにされた時の悲しみを思えば、次の標的に選ばれた友の悲しみも、つらさも判り、いじめる側にだけはたてないはずなのに、その時は自分で復帰できた喜びの大きさに、そんな事を考える余裕もなかったし、指示に従わず再び標的にされるこわさを思えば、むしろ活き活きといじめる側にたっていた自分を思い出す。

今、いじめが大きな社会問題となっているが、いじめという言葉を耳にする度に、出来ることなら消してしまいたくなるようなこの記憶がよみがえってくる。そして、なぜ当時のいじめには、この様な復活があったのか、なぜ自分が、この一、二か月に耐

えることが出来たのか、を思う。昔と今とでは子どもをとりまく環境が違う、否、子ども自身が変わった等々多くの意見がたたかわされ、いじめのない社会作りが指向されている現在。いじめを肯定するつもりはないが、この小さいいじめの中で、私の自身身の中に育ったものの大きさを思う時、如何なるいじめもあつてはならないとはい切れないものを感じる。とことん相手を追いつめないところで、いじめがやめられる節度。その節度があることが信じられるからこそ耐えられる力。それを育てることこそ保育する者に与えられた大きな大きな使命なのではないだろうか。

このテーマを与えられ、遠くの方へ追いやられていた過去と久し振りに向い合い、その感を一層強くしている自分が今、ここにいる。

(東京都教育委員会アドバイザリースタッフ)

「児童の世紀」を振り返る

— その十四 —

本田 和子

「いまだ人ならぬもの」の系譜

— 「七歳までは神のうち」 —

かつて子どもとは、多く生まれて多く死ぬ者であった。「七歳までは神のうち」という俚言は、わが国の伝統的心性を表すものとして云々されるが、

この言葉を発掘し、巷に流通させたのは、周知のようには日本民俗学の草分け柳田国男であった。彼は、「先祖の話」「家閑談」「神に代わりて来る」等の論稿において、子どもたちの葬送儀礼の特異さに注目し、それを次のように解釈している。

すなわち、幼い者たちの遺体が通常の墓地に埋葬

されるのでなく、鴨居の下などにさりげなく埋められたり、あるいは、柩のなかに「精進」ならぬ魚などの生臭物が入れてあったりするのには、幼い子どもが「生まれ変わり」が願われているからと言うのである。彼らの霊は成人のそれと異なり、祟りを恐れて特別の地に葬られるのでも、また、霊がさまよわないように土や石の重しの下に置かれるのでもなかった。日常の暮らしのなかの、しかも、人々が最もよく行き交うところに埋葬されて、一日も早い「生まれ変わり」が期待されたのである。

治療医学も予防医学も未発達な時代にあつて、この世に生を受けたとは言え、いつあの世に連れ戻されるか知れないのが、幼い者たちの宿命であつた。母親たちは、生まれたばかりの赤ん坊を襦袢に包んで、亡霊の目を眩ませたと言うし、また、赤ん坊がクシャミをすると、霊魂がその身体から抜け出してしまふと案じたとのことだ。



しかも、その以前に、彼らは、人として無事に生まれ出て、人として成長の歩みを開始し得るか否かすら、未知数の頼りない存在であつた。身ごもつた母親は、やむない事情によつて、「子降ろし（墮胎）」という手段で生まれる前の生命を亡きものとし、また、わが身の胎内で十ヶ月も育んだ子どもすら、「間引き」という嬰兒殺しの手法によつてその生命を葬らねばならぬこともあつた。人口抑制は、村落共同体の生き延びる知恵であつたらうから、生まれ子の生殺与奪の権は、単にその子の父や母の範疇になく、一族の長や共同体の管理者に委ねられている場合もあつたのである。

生まれたばかりの子どもが「間引き」によつて葬られた場合、人々はその事実を「殺した」とあから

さまに言挙げするのでなく、「お返しした」「山へ行かせた」「鯨採りにやった」など特有の隠語で、お互いの意志を通わせ合ったとされている。『日本産育習俗資料集成』は、一九三〇年代の調査時点でも、「ヒガエリ（日返り）」「お地藏様の弟子にした」「蜆拾いにやった」など、「間引き」を意味する言葉の保存されていることを示して、伝統的な習俗とそれにまつわる心性の残り香を伝えている。

生まれたばかりの子どもを膝の下に入れて圧殺する、あるいは、鼻と口を押さえて窒息死させる……。これは、紛れもなく、力を持つ大人が、力を持たぬ無抵抗の者に対して手を下すという意味で、最も残忍な第一級の殺人行為に他ならない。しかし、それが、「お返し申した」「山へ行かせた」など、さながら、生まれる以前の彼岸へ、あるいは、山や川などの遠い異郷へ、彼らを旅立たせたかに表現されるとき、「所詮、赤ん坊とはどこか見知らぬ

他郷の者」とでもいう、神秘的な感慨が人々を覆って、嬰兒殺しのおどろおどろしさは融解し、おぞましさも薄れるのではないか。「間引き」を表す隠語たちは、「間引き」という「子殺し」を、不可避として生きねばならない人々の切ない知恵の所産と見ることも可能である。

しかし、考えてみればこのような表現が流通した背後からは、赤ん坊の死をどのように捉らえる当時の人々の心性が透けて見えてくるのではないか。眼前の現実を糊塗するために「言葉」が作り出されたというのでなく、その逆。すなわち、赤ん坊の死を、「彼らがついと故郷に帰ること」、あるいは「山や川にふいと出ていくこと」などと把握するような、淡々とおぼろな心性が人々を支配して、言葉はその所産に過ぎないのかも知れないのである。ということとは、生後間もない赤ん坊や幼い子どもは、いまだ人のうちに含まれず、そのゆえに彼らの

死もまた、成人と異なつて特別の意味を付与されていたのではなかったか。彼らは、いまだ人の範疇に組み込まれない「人ならぬもの」、それは「神あるいはその他の聖なるもの」の仲間かも知れず、あるいは、「妖精や小人のような悪戯者」の類いかも知れない。いずれにせよ、言葉なく知識なく世の理に染まぬがゆえに「動植物」とも交合し得る秩序世界の外の存在であつた。とにかく、七歳になるまでは、彼らは「人ではない」。結果として、「間引き」という名の子殺しも「殺人」の血なまぐささからは遠く、死者もまた「崇りなすもの」の恐ろしさから逃れることが出来た。柳田民俗学は、先の子どもの葬礼だけでなく、死者をもてなす「精霊飯」や、来訪神を招く祭礼の始まりに、幼い子どもに振られる役割の重要さに着目して、彼らが、人よりも、神その他の靈に近い存在であり、そのゆえに、成人にとっては禁忌であるもろもろの行為が彼らに委ねら



れていたと解釈する。とすれば、伝統的世界における「人の誕生」は、生後七年を経て始めて認定されたということだろうか。

子ども観と人口動態

—乳幼児死亡率の増減と

子ども観・子どもイメージの変貌—

幼い子どもたちが、いまだ人の範疇に組み込まれ得なかつたのは、彼らの死亡率の高さにその一因があるとされる。彼らが、生まれてはきたものの容易に死の手に抱え込まれて、無事に「人」として生き続けるか否かも定かではない頼りない存在であつてみれば、直ちに共同体の構成メンバーと見なすことが逡巡されたとしても不思議はない。抜け出しや

すい子どもらの靈魂が彼らの体のなかに定着し、疱瘡（天然痘）や麻疹などの大患もつつがなく済ませ、曲がりなりに「人」として歩き出すことが出来るのが、七歳ということだったらしい。

疱瘡は、わが国に侵入した六世紀以降、大流行を繰り返し多くの死者を出してきたが、死者の七割近くが子どもであったとされている。たとえば、江戸時代後期の飛騨地方の一寺院の過去帳に記された死因の首位は疱瘡であり、その六十九パーセントは乳幼児であった。現存する多くの医書に見られる疱瘡関係の記述が、概して小児の病状や手当についてのものであるのも、この病が、「子どもの死病」として位置付けられていたことを物語るものと言えよう。

子どもたちは、七歳になると氏神の「氏子」として加盟儀礼を経験させられ、また、「子ども組」などの組織に加入して共同体の一員としての生活教育

の対象とされた。こうした民俗的慣習が物語るのも、七歳以前の子どもの死亡率の高さであり、生命の保証が困難であったと言うことでもある。それは、多く生まれ多く死んでいく時代の子どもらに負わされた、やむを得ぬ道程でもあった。せっかくこの世に生を受けたにもかかわらず、ほどなくこの世の短い生活に別れを告げていずこへともなく去って行く子どもたちを、「人ならぬもの」神」と位置付けることで、子どもゆえに果たし得る特有の務めを委ねることで、彼らを楽しませると同時に、他方では親たち自身の空しさを慰め、子を失った悲しみを癒す。古い時代に、子どもの周辺に作り出された様々な伝統行事や子どもイメージの後からは、「死にやすい子ども」を巡ってそれに対処しようとした親たちの心性が透けて見えてこよう。

ところで、「児童の世紀」と命名された今世紀の

子ども観・子どもイメージは、言葉のおおまかな意味で「児童中心主義的」と呼ばれたりもするそれらは、「子ども」を「人ならぬもの」としてではなく、「注視され尊重されるべき「人」として、世界の中心に押し出すことに成功している。ということは、今世紀の子どもたちを覆ったのは、「多く生まれ多く死ぬ」定めではなく、「死なずに生き延び得る」運命だったと言うことが出来よう。そのゆえにこそ、彼らは、次代を担う「希望の星」と見なされ、明々と明るい照明の下に照らし出されることになったのであった。

ジェンナーによる種痘法の発見を契機として、疱瘡は「死病」であることを止めた。しかも、それは、単に先進国だけの問題ではなく、一九五八年以来の世界保健機構による「天然痘根絶計画」の結果、一九八〇年には、「天然痘根絶宣言」が出されてもいる。わが国の場合も、幕末に輸入された種痘



は、先覚的な医師たちによって啓蒙活動が続けられてきた。しかし、明治時代の罹患者に対する強制隔離措置が社会問題となるなど、紆余曲折もあって、明治年間には、一万人前後の死者の出た大流行が四回も記録されている。したがって、種痘が普及し、疱瘡が子どもたちの生死を司る祟り神の座を降りたのは、今世紀に入ってからと言えよう。いま、私たちの視界から、「疱瘡」も「種痘」も姿を消し、それどころか、乳幼児病のリストから従来の馴染みの病名が消えて、彼らが進歩した医学・医療のもと、死から解放された存在へと変わったことが示されている。

今世紀、子どもたちは成人へと生き延びることを保証されている。そして、今世紀初頭を賑わした

「優生学」は、遺伝子の操作によって「よい子ども」が作られ得る可能性を示唆し、さらに、産児制限運動は、母子ともどもを多産から解放して、「少なく生んだ子どもをよく育てること」の賢さを鼓吹した。今世紀の子どもたちは、多産多死の周縁的存在から連れ出され、少産少死の中心的希少価値存在へと移し替えられたのであった。

新薬や医療技術の招き寄せた

「子ども—大人関係」の変貌

第二次大戦後、ペニシリンに始まる抗生物質の発達は、子どもたちの生の状態に大きな変化をもたらした、延いては「子ども—大人関係」と「子ども観」の変貌をも招き寄せてしまった。短絡的すぎるとの誇りを承知であえて言うなら、驚異的な新薬の開発により、子どもたちは「簡単には死なない者」へと変化し、大人たちもまた、「子育てに対する惧れと

慎み」を放棄する結果を甘受したのである。

一九二九年、フレミングによって青カビから発見された抗菌性物質ペニシリンは、一九四〇年以降、フローリー、チェーンらが分離抽出に成功し、さらに臨床的有効性も確認されたことで、医学界の革命的出来事として一躍世界中の注視的となった。わが国においても同様な開発が進んでいたが、敗戦時の混乱のなかで中断されていたため、新薬ペニシリンの恩恵は、アメリカ占領軍を経出してもたらされることになった。

ペニシリンが、一般病院にも配給され、広く一般の人々を病氣から救出するのに手を貸し始めるのが、一九四六年である。そして、翌年には、国内におけるペニシリンの量産が報じられている。結果として、乳幼児死亡率の上位を占めていた肺炎や疫病など、感染性の疾患はこれら新薬の劇的な効果により、早々と子どもたちの世界から追放されることに

なった。従来は、死に至る病として親たちを震えさせた諸疾患、それらは、抗生物質の注射一本でその威力を失う。となれば、大人たちの子どもに對する意識に、少なからぬ変化が生じるのも当然であろう。幼い者たちは、成人するまで生きながらえるか否かも定かではなかった「子どもという弱者」から、病院にかつぎ込まれて効果抜群の新薬の投与と受ける得るならば、容易に死ぬことのない存在へと変わったのだった。

しかし、ほどなく、この奇跡の新薬は、その負の側面をもあらわにして、親たちを新しい葛藤に誘い込む。たとえば、一般には予期されえなかつた副作用がそれである。カナマイシンなどその典型例であるが、当該の疾病は治癒したものの、後遺症として極度の聴力失調に見舞われ、その後の生涯を障害者として過ごすなどという、新しい事態に直面することになったのである。病気に苦しむ子どもを「いま現



在の状態」から救出することが、その後の長い人生の妨げとなるかも知れぬ。となれば、治療に立ち会う親たちの心境は複雑であろう。極端に言うなら、病児の治療に携わる大人たち、親や医師なども含めてであるが、手を差し伸べるのは、「子どもの生命か」あるいは「子どもの人生か」という、二律背反に引き裂かれることにすらなつたのである。

ことは抗生物質だけの問題ではない。今世紀後半に飛躍的に発達した医学・薬学を基盤とする医療技術は、親や治療者たちに苛酷な選択を要請している。すなわち、その採択に当たって、「正負両様の可能性」を視野に入れておく必要が生じたのである。たとえば、先天性障害児や極小未熟児の生命は手術や人工保育器の進歩によって、従来の致死率や

救命基準を無効化させた。結果として、子どもは、一度生まれてきた以上は、殆どの場合、「生き続けることの可能な存在」となったのである。しかし、ここでも、選択は、子どもの将来に対する「正負、両様の可能性」をにらんで行われる。

「わが子とは、一体、何ものであるのか」「親、あるいは治療医には、果たして、この子のその後の人生を左右する権限が与えられているのだろうか」。

こうして、発達した医療技術は、致死率を低下させ延命率を上昇させるのと引き換えに、親や医師など、子どもにかかわる大人たちの前に、より深刻でより解答困難な新しい課題を提供したのであった。

かつて、「授かるもの」であった子どもは、「七歳までは神のうち」にあり、生も死も人為を越えた超越者の手に握られた存在であったから、「親」と呼ばれる人たちは、彼らをつかの間に保護し必要とされる期間を養育に従事するだけであった。先に触れ

たように、「間引き」という「子殺し」の行為すら「お返しする」と呼ばれて幼い者と彼岸との繋がりが強調されていたのも、こうした心性と無縁ではない。しかし、計画出産や人工受精が発達し、予防医学や新生児医療が飛躍的に進歩した現在、「産むこと」も「育てること」もすべて、人の力で操作可能と化した。極言すれば、子どもとは、「生かされるのも殺されるのも大人の手のうち」にある存在となり、親や医師たちは彼らの生殺与奪の権を手中にしたのである。かつて、大人と子どもの間に横たわり、人の力の及ばぬ域に手を貸していた超越的な力が消滅したいま、新しく生じたこの大人―子ども関係は、これからどこへ向いて歩き出そうとしているのだろうか。

(聖学院大学)

子どもものいる暮らし―男・夫・父

私の言い分

中島 隆

この春、長男は高校へ長女は中学校へと、それぞれ進むことになった。結婚して今年で十七年目、ハネムーン・ベイビーである長男と三つ違いの長女――この子らの成長が、そのまま我が家の歴史である。結婚した当初、妻は何が何でも仕事をして、家事も子育ても立派に両立させてみせる、と息巻いていた。ところが、臨月間近に休職に入り、いざ生まれてみると、これが計画どおりには行かなかつ

た。バリバリの仕事人で、どちらかというところ、彼女が、産み落としたとたん『聖母マリア』のように変身！ 電車の中でマナーの悪い子どもを見るとあからさまに不快な表情でニラんでいたような彼女からは、想像もつかないような生活が待っていた。

当時、私は仕事が忙しく、帰宅は早くも九時十時頃。もともと身体の弱かった妻だが、初めての育児

は相変わらず忙しかったが張り合いがあった。家に帰れば家族が待っている……それだけで良かった。他愛のないおしゃべり、騒々しいが日に日に成長していく子どもの様子は、何よりもうれしかった。

ただ、今の若いお父さんが「娘のピアノの発表会なので」といって仕事を休むのを聞いてびっくりしてしまう。私は、といえば息子の幼稚園の行事には、ほとんど行けずじまいだった。一度だけ、妻が病気で「這ってでも行く」と言った娘の遠足に代わりに行ったことがある。若いお母さんに混じって「お遊戯」をさせられ、泣きたいくらいだったが、娘の嬉しそうな顔を見て我慢した。

夏は海、冬はスキー。一年中戸外で遊ぶ機会をできるだけだけつくり、キャンプや登山にもよく行った。遊園地やテーマパークではなく、自然の中で自由に遊べる子になってほしいと思い、魚採りの仕掛けや虫取りのコツも伝授した。道具がなければ遊べないのではなく、あるものを使って工夫することを学ん

でほしいと思った。その結果、二人とも「遊べ遊べ型」人間になってしまった。特に下の娘ときたら「虫愛する姫君」そのものである。汚れたり、濡れたりを厭わない野生児になってしまった。冗談で「アフリカの自然動物保護監察官になれるぞ。マサイ族のお婿さんでも連れておいで」などと言っていたのだが、どうやら本気で考えているようなので、親の方がハラハラしている。息子はサッカーに夢中で「プロになる」と本気で思っている。進路もさつさと決めて、「親父、もうオレのシユートは止められないんじゃない？」などとぬかす。悔しいが、そうだろうと思う。小さいころから、体ごとぶつかってきてドタン、バタンとプロレスまがいの遊びをよくやってきた。世間では「中学生になると口もきかなくなると、親と子の距離をとりたがる」というが、我が家に関してはそう変わった様子は見られない。相変わらずチョッカイを出しては騒々しく肉弾戦を繰り返している。言葉に出してうまく表現でき

橋詰せみ郎の家なき幼稚園から

福元真由美

はじめに

自然というのは、幼児期の子どもにとって欠くことのできない教育的な環境だと考えられている。ひとりひとりの子どもが、身近な動植物や自然現象にどのように興味、関心をもち、探求心を働かせていくか、そ

こで保育者が、どのように子どもの自発的な活動を大切にしていくかは、幼児教育において重視されている観点である。さらに、自然というものが幼児教育の用語として積極的に使用されるにすぎない、自然への関心や配慮を無視した保育は、非教育的で改善されなければならぬという問題を生むまてになっている。

このように、幼児教育に自然を分かち難く結びつけていく認識は、日本の伝統的なものというよりも、大正期というある歴史的な時点で強く主張され、全国的に宣伝、普及されたものといえる。今回とりあげる橋詰せみ郎（本名 良一、一八七一一一九三四年）の家なき幼稚園（一九三二年設立）は、大正後期から昭和初期にかけて、保育における自然教育の流行ともいえる現象を生じさせ、多くの教育関係者の注目を集めた幼稚園である。家なき幼稚園は、はじめから「家」^{サト}園舎をもたずに、幼児たちを周囲の川や森に連れ出し、自然の中で保育することを特徴としていた。

家なき幼稚園の自然教育が興味深いのは、明治末期から大正期の、大阪における郊外住宅地の成立と密接に関係しているからである。一九〇九年、箕面有馬電気軌道（阪急電鉄株式会社の前身、以下箕面有馬電鉄）の専務取締役小林一三は、日本で最初に、大阪市内に通勤する給料生活者向けの沿線郊外住宅地を開発

した。大阪市外の西北に位置する、家なき幼稚園の設立された池田室町は、その翌年に行われた第一回目の分譲地である。橋詰の自然を重視する幼児教育は、郊外住宅地という新たに形成された都市空間において生み出され、さまざまな実践の様式により演出されたのである。以下では、橋詰が、郊外住宅地の成立とあいまって、幼児教育における自然の重要性を主張した経緯と、家なき幼稚園の自然教育の特徴についてみていこう。

郊外住宅地の成立と家なき幼稚園の設立

小林は、富豪向けの高級別荘地としてではなく、都市部のより所得の低い給料生活者を対象に、彼らの生活意識に見合う郊外型の生活空間をつくらうとした。箕面有馬電鉄の宣伝する郊外の自然景観は、それ自体が、都市部の住民には接近しやすい観光地的魅力をもち、自然と触れあう生活のイメージを喚起するもの

だった。小林は、一九〇九年発行のパンフレット「住宅地御案内」で、自然の豊かな「田園趣味」に富み、家庭での「慰安」を保障される「模範的新住宅地」として、この地を宣伝した。^{註2}小林の目指す理想的な「郊外生活」は、それが拒否しようとした、劣悪な環境で非衛生的、非人間的な大阪市内の工業地域との対比で把握されている。

池田室町は、大阪の新中間層に属する人々が、自然との一体感、家庭生活の充実を理想とし、その実現に向けて努力する場となった。^{註3}池田室町で買収した二万七千坪の土地に、二〇〇戸ほどの屋敷を建設した小林は、我が国初の月賦制住宅ローン方式を販売に取り入れ、ほぼ完売させている。ここに移住した人々の職業は、医者、銀行・商社のサラリーマン、画家、音楽家、大学教授、弁護士、学校の教員などが多い。^{註4}大阪毎日新聞社の事業部長だった橋詰も、一九一二年に、小林のすすめで妻や子どもと移住した。箕面有馬電鉄

発行の『山容水態』（一九一五年）には、郊外に移住した人々の動機や移住後の健康状態、子どもに関する質問の回答が掲載されている。彼らは、「家族の健康」や「園芸の趣味」、自然への敬愛のために「不潔なる市街を避け」て移住し、帰宅すると「気分が一新する」「精神上何となくゆつたりした気分」になるという。^{註5}彼らは、これまでの都市生活から、自然と融合した幸せな家庭生活を求めて郊外へ移住し、自らが理想とする生活の実現しつづつあることを実感していたのである。

橋詰は、一九二二年の家なき幼稚園の開園に先立ち、池田室町の家々に次のような幼稚園設立趣意書「『家なき幼稚園』の発起」を配布した。

「広い広い自然を占有している郊外住宅地の人々が大阪あたりの真似をして窮屈な家を建てることから手を着けなければ幼稚園が出来ないように考えるのは詰ま

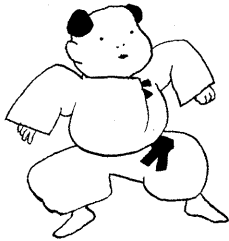
らないことだと思えます。

工夫のつけかたによつては『家なき学校』でも立派に出来るものだと考えて居ますが、保育にあつては特に『家なき幼稚園』が自由で、簡単で、愉快だと思われ^注ます。」

大阪との対比で郊外の価値をうたい、「自然をそのままの保育室に」という発想をもつ幼稚園は、自分たちの生活欲求を満たす教育を求めて郊外の住民を駆り立てた。このため、園児の募集に、最初二〇人の予定が、実際は六〇人の申し込みがあつたという。橋詰は、この家なき幼稚園の園長を務め、続いて宝塚、箕面、十三、雲雀ヶ丘、大阪（一九二四年）、千里山（一九二五年）に、あわせて六つの家なき幼稚園を開園している。

郊外の人々を魅了した自然の教育は、園舎をもたない幼稚園の日々の保育活動そのものから生み出される

ものだった。幼稚園の保育項目は、「歌えば踊る生活」「お話をする生活」「お遊びをともにする生活」「回遊^{マユ}にいそしむ生活」「手技を習う生活」「家庭めぐり」の六つである。自然の教育を特徴づける「回遊」は、橋詰によれば「自然に親しむ」「自然を観察」するため、保育者が幼児を連れ歩き「石つみ」「魚つり」「水あそび」「土ほり」「草つみ」「虫とり」「鳥の声を聞く」の活動をさせることである。^注毎朝、集合場所の呉服神社の境内に集まった後、保育者と幼児は、ごごぎ、組み立て机、折り畳み式の椅子、乳母車に取りつけたオルガンなどを持ち運び、付近の猪名川、大光寺の森、城山の野原などに出かけて活動している。雨や猛暑の日には、神社の絵馬堂を借りていた。



家なき幼稚園における自然の教育

橋詰の幼児教育論における自然

このように幼稚園から戸外に出て、幼児を自然に親しませる活動は、家なき幼稚園だけでなく、ほかの幼稚園にも取り入れられていた。大阪の愛珠幼稚園をはじめ、「郊外保育」「園外保育」は、すでに明治期の幼稚園でもしばしば行われていた。大正期になると、幼児の直接経験を広めることが再認識され、「郊外保育」がよく行われたほか、園芸や動物の飼育を通じて、自然界のことを談話に取り入れる試みもなされた。^{註7}

これに対し、家なき幼稚園の保育実践が興味深いのは、それが、保育における人間と自然との関係について、ほかとは異なる認識により支えられていた点である。著書『家なき幼稚園の主張と実際』（一九二八年）において、橋詰は、「人と人との相互生活の基調を整える」ために、「自覚、自省、自営、互助、互楽」す

る「子供同士の世界」^{註8}が必要だという。そして、この「世界」をつくるのに「大自然」が「最もよい所」^{註9}だとしている。この「自然の子供の国」は、保育者と幼児とが「自然に相触れ」ることにより、「相互愛」を「発露」させ、これを基盤とした関係を生成させる空間として捉えられた。^{註10} 保育者の葛野宣子は、橋詰の設立した姉妹学校の機関誌『愛と美』（一九二七年一月号）に「おのずと歌に」と題した保育日記をのせ、次のような幼児のやりとりを記している。

「君ちゃんが『先生、この野菊、こないになって泣いてなさる』といました。『どんなに』と見ると、花弁が半分ほど落ちて本当にしよんぼりして居ました。春ちゃんが大きい色の白い菊を摘んで『これはお嫁さんよ』といました。すみちゃんが色の濃い花をとって『これは娘さんよ』といました。私が、しおれて縮んだ花を見て『これはおばあさんよ』といます

と、雪ちゃんが「これここに泣いて居るのがあるワ」といいました。君ちゃんが又小さい蕾を見つけて「こんな、赤ちゃんが」と嬉しそうに見せに來ます。「ほんに、イーベビちゃんネ」「先生、ベビちゃんて赤ちゃんのこと」「そうヨ、ベビちゃんがだんだん大きくなってネ、幼稚園へ来てネ」と話しながら（幼児の摘んだ花を束ねながら、保育者は園歌を口ずさむ 筆者注^{注10}）

「泣いている野菊」という「君ちゃん」の物語は、保育者に花が「本当にしょんぼりして」いたと感じさせ、しおれた「おばあさん」の花を発見させた後、「雪ちゃん」に「泣いて居る」花の物語の世界を開かせた。一方、花が「お嫁さん」「娘」になる物語は、保育者に摘んだ花を見せる行為を通じて、「君ちゃん」の物語へと引き継がれていく。幼児や保育者たちが、自然を媒介にお互いの物語を交換し共有しあう関係

が、ここでは成立していたといえるだろう。いまだ人為的努力のみられない状態において、自然な憐憫のうちに、人間が内発的に共感し、隣人と同一化していく世界が描かれている。家なき幼稚園にとって自然は、幼児や保育者の共感や共同性にもとづく生と矛盾しない、これを妨げる障害の取り除かれた場として想定されていたのである。

自然教育の演出と宣伝

橋詰の、幼児が自然の中で共同性を編みあげる教育のイメージは、「家なき」であつてこそ、日常的に現実化されていく感覚を抱かせるものだった。しかし、家なき幼稚園は府の認可を得るために、園の名称や設備を変更せざるを得なくなった。一九二九年、大阪家なき幼稚園が、幼児を郊外に連れていくために使う自動車の特税を申告するために、「幼稚園令」の定める設備を整え、府の認可を得る必要が生じた。そこで、

園舎を建てて、同年一〇月に大阪のみ自然幼稚園と改称することになる。^{註11}一九三〇年には箕面、翌年には池田を含む四園が、府の認可をえて自然幼稚園と改称された。

橋詰は、各園が自然幼稚園として開園するたびに、改名披露のため、全園合同で「自然物手技」の展覧会を開催した。「自然物手技」とは、例えば、ドングリを頭に、木の葉を着物に見立てた人形のような、自然物を材料にした製作品である。初めての展覧会（一九二九年一〇月）で、保育者たちは、集まった親や教育関係者に、普段の遊戯の見学が無理なら自然物の製作品だけでも見てもらおうと、会場の保育室を製作品で埋めつくした。^{註12}「自然恩物手技」は、具体的な製作品を通じて、自然を用いた幼児教育の価値を人々に提示するものであった。だがその一方で、幼児が保育者や仲間と共同性を編む場として、自然を捉えようとする意識は、製作品の展示という行為からは捉えにくく

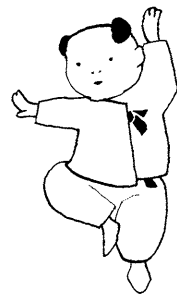
なつたといわざるをえない。

このような家なき幼稚園における

自然教育の変化

は、どのような方

法で「自然物手技」を宣伝し、その教育的価値をいかに演出するかという課題を生じさせた。「自然物手技」の宣伝の方法として最も利用されたのは、雑誌や放送というメディアの活用である。一九三〇年発行の『愛と美』（六月号）は、「自然の恩物号」として自然物の製作品について特集し、翌年の同誌七月号から一二月号では、春と秋に行う「自然物手技」の作品の材料と作り方が、図柄入りで説明された。一九三〇年七月三日には、ラジオの子ども向け番組で、橋詰と保育者が「こんな手技を御存じですか」と題し、テキストを用いて、自然物での自動車や蝶、兵隊の作り方を教え



ている。同年一〇月に名古屋で開催された第五回全国幼稚園関係者大会では、橋詰たちが「自然恩物の手技創作」という発表を行い、その翌日には、名古屋放送局から「自然恩物手技」の放送をこなした。

さらに興味深いのは、大阪三越という百貨店における「自然物の子供手細工展覧会」の開催である。これまで、展覧会は幼稚園の保育室で行われていたが、一九三一年以降は、この百貨店の六階を会場にしている。毎年一月中旬に三日間開催され、親子連れ、学生、教育関係者らが千数百人も来観し、第二回以降は、各園の保育者がパンフレットも作成して製作品の説明にあたった。当時の会場の写真や橋詰、保育者らの記述によると、画用紙に木の葉で人物や車を型どった作品が会場の壁面を埋めつくし、陳列台には、松かさや木の実、果物を材料にした動物園や大演習の模型などが並べられている。この展覧会は、教育的効果があるとみなされた自然の一部を製作品としてカタログ

的に提示し、来観者に「此の自然を要素」として幼稚園のつくりだした教育の世界、および教育のスタイルを示して、その普及、拡大をはかろうとするものであった。¹³

おわりに

郊外住宅地では、現実的な生活の理想郷を求めて移住した人々が、幼稚園の新しい受容層となった。家なき幼稚園は、こうした人々の欲求や価値観を表現する教育の新しい形式を、高度なメディア文化と、家庭や娯楽への欲求を満たす消費空間とを媒介に創造していったといえる。幼児教育において自然を重視する言説と実践は、以後も、賀川豊彦の松沢幼稚園などにみられるように、郊外を舞台に大量に生み出されていった。新しい郊外住宅地が次々と開発されていく現在において、郊外に成立した幼稚園、幼児教育についての歴史を見直していくことは、今日につながる問題に通

じていくことになるのではないだろうか。

——終——

(東京大学大学院)

注

1 橋詰は、一八七二年兵庫県尼崎市に生まれ、神戸師範学校を卒業してから、大阪市の小学校の訓導を務めた。一九〇六年に大阪毎日新聞社に入社し、一九二〇年に初代事業部長となる。

2 「住宅地御案内」、箕面有馬電気軌道株式会社、一九〇九年(所収小林二三『小林二三全集』第一卷、ダイヤモンド社、一九六一年)

3 ルイス・マンフォード『都市の文化』、丸善、一九三八年
4 池田市史編纂委員会『池田市史第五卷 民俗編』池田市、一九九八年、七五七、七五八頁

5 『山容水態』、箕面有馬電気軌道株式会社、一九一五年、

一〇一―一五頁

6 橋詰せみ郎『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書株式会社

資社、二五頁、一五二―一五四頁

7 日本保育学会『日本幼児保育史』第三卷、フレールベル館、

一五五―一三二五頁

8 橋詰、前掲書、三、四頁

9 同右、七―一頁

10 葛野真子『おのずと歌に』『愛と美』第一卷一月号、姉様

学校、一九二七年、一五頁

11 橋詰「自然幼稚園になるまで……家なき幼稚園から……」『愛

と美』第三卷一月号、前掲書、一九二九年、二二、二

三頁

12 森垣操子「初めての展覧会」、同右、一九一三〇頁

13 橋詰「第二回の幼児手細工展を大阪三越に開催して」『愛

と美』第七卷一月号、前掲書、一九三三年、一八頁

特撮・アニメ今昔

— 『機動戦士ガンダム』シリーズ考

山本 政人

以前にも書いたことだが、私の家ではケーブルテレビに加入していて、特撮やアニメ、ドラマなど主に一九七〇年代の番組を見ることができる。私はそこで子ども向けの特撮やアニメをよく見る。

あの頃はやはりテレビの全盛期だったのかもしれない。玉石混淆ではあるが、どの番組にも活気があり、明るさを感じられる。それに比べると、今の番組は絵もきれいだし、話もよくできているが、どことなく暗さ、影が見え隠れしているような気がする。

昔の特撮、アニメは荒唐無稽もいいところだった。その代表が怪獣ものである。あんなでかいのがやってきて、都市を破壊された日にはバブル崩壊どころではない。しかし現実性はないから、あくまで空想として楽しめたのだった。しかし八〇年頃から流れは変わってきた。話が小さくなって、リアルになってきた。

「ゴジラ」に代表される怪獣は、北の海あるいは南の海からやって来て、日本に上陸して都市を破壊していった。この巨大な敵に対して、人類は持ち前の知恵と科学の力で対抗した。原始人が巨大なマンモスに立ち向かうかのごときものであった。しかしやがてゴジラにはライバルとしてモスラやキングコングといった人類寄りの怪獣が現れ、両者の対決がメインテーマとなった。こういった展開は当時のドラマやプロレスなどのショウ番組の定番だった。いわゆる勧善懲悪であり、悪役と悪に立ち向かうヒーローという図式があった。

七〇年代、経済成長と科学技術の進歩とともに、怪獣は主役の座を奪われていく。悪役は宇宙からやって来るようになった。同時にそれに立ち向かう正義の味方も宇宙からやって来る。「ウルトラマン」である。このシリーズは形を変え今も続いているが、一見してわかるように、同じシリーズではあるものの、初期の作品と最近のものとはかなりトーンが違う。このことについてはまた別のところで論じるべきだが、一つだけ言えるのは、力を入れているところが違うということである。初期の作品では、特撮部分はもちろん、

脚本やカメラワークなど、力が入っていることが伝わってくるようだった。最近の作品はコンピュータグラフィックの多用により、映像は美しく、ある意味リアルになったが、迫りに欠ける。私などにとっては、コンピュータグラフィックはむしろ空虚なものに見える。話も初期の作品の方がわかりやすかった。最近の作品はわかりにくいのが、わかってみるとどこかで聞いたことのある話である。映像の精緻化とストーリーの複雑化、陳腐化。これが日本の特撮やアニメがたどってきた道だった。

宇宙からの侵略者の目的は地球征服である。宇宙人は地球を植民地にし、移住して来て、地球人を奴隷としてこき使おうというつもりだったらしい。しかしそれはすでに地球人が同類に対して行ってきたことである。あまり面白くないので、さまざまストーリーが考え出された。たとえば、宇宙飛行士を乗せた宇宙探査機が行方不明になる。何年か後にその探査機が地球に帰って来るが、宇宙飛行士は漂流中たどり着いた惑星の過酷な環境のなかで、怪物になってしまっていた。そして自分を宇宙に送り出した地球に復讐しようとするという話。名作だが、おそらくもともとなる作品があったのだろう。このパターンはその後日本だけでなくアメリカでもよく使われていた。

その後、宇宙人の目的は地球征服ではなく、地球人類絶



滅という過激なものになる。好戦的で兵器開発に秀でた地球人を野放しにしておくと宇宙の平和が脅かされる。だからその芽を早いうちに摘み取ってしまおうというのである。これもよく聞く話だが、地球征服よりシビアである。このパターンはアニメでよく出てきた。従来、怪獣や宇宙人の被害に遭うのは罪もない人々だったのだが、アニメのなかで、人類は宇宙の平和を脅かす危険な存在と位置づけられる。このあたりから、特撮やアニメが変わってくる。

その変化について述べるのは簡単ではないが、一言で言えばベシミズムである。人類が行ってきたことへの反省、さらに人類という存在そのものへの懐疑、否定である。SF作品のなかで、人類はその存在を幾度となく否定されている。たとえば『二〇〇一年宇宙の旅』。スーパーコンピュータが人類に対して反乱を起こす。なぜなのかはよくわからなかったが、『ターミネーター』でもそうだった。コンピュータやロボットの反乱というパターンも昔からよく使われる。それらの作品で見られたのは、人類自らが作り出した機械が知性と自我を持ち、人類を否定するというパターンである。しかしベシミズムはこれにとどまらない。最終的には人類が人類を否定するというパターンに帰着し、それが定着する。代表的なものが『機動戦士ガンダム』である。

『機動戦士ガンダム』は一九七九年にテレビ放映が始まり、今年で二十年になる。第一作は『宇宙戦艦ヤマト』と同様、再放送から注目され、その後新作もいくつか作られた。し

かし私を見るところ、やはりこれにも「映像の精緻化とストーリーの陳腐化」の法則が当てはまる（そんなことを言うとはファンは激怒しそうだが。特に『新機動戦記ガンダムW』のファンは）。第一作以来、繰り返し描かれてきたのは、人類同士の戦いである。話としては「地球に住む人類」と「宇宙に住む人類（スペース・ノイド）」の戦いなのだが、「地球に住む人類」は地球環境を破壊しながら惰眠を貪る悪者だというのがスペース・ノイドの理屈で、地球人類打倒のために立ち上がる。しかしそんな自分勝手な理屈に対して、地球人類も敢然と立ち向かい、壮絶な戦いが繰り広げられる。

アニメのなかではこれが個人対個人の戦いとして描かれる。「シヤア対アムロ」（機動戦士ガンダム）、「シロッコ対カミーユ」（機動戦士Ζガンダム）、「ハマーン対ジウド」（機動戦士ガンダムΖΖ）などなど、地球人類に鉄槌を下そうとする者と、血の粛清を許さず、人類に明るい希望を示そうとする者とが戦いを繰り広げる。そして勝者は常に後者すなわち人類に希望を示そうとする側だった。

勝者に共通していたのは、彼らがみな少年だったことである。正確には年齢不詳なのだが、主人公はみな思春期の男子だったようである。ただ、シリーズが新しくなるに従い、おそらく低年齢化していった。そしてその主人公のライバルは最初は「シヤア」のような成人男性だったが、途



中から女性になる。最初は「大人対子ども」という図式だったのだが、途中から「女性対子ども」という図式に変わる。そして主人公と対峙する女性たちは、私の見るところでは「母なるもの」の象徴である。

実は「母なるもの」の存在は第一作から描かれていた（具体的には「ラファ」というキャラクターであるが、彼女はアムロと戦い、死んでしまう）。その描かれ方は、戦う男たちを癒し、安らぎを与える存在というものだった。しかし後の女性たちは違う。主人公の少年たちが戦う相手なのである。少年たちは彼女を倒し、乗り越えていかなければならない。それを癒しを与える存在と同じく「母なるもの」と呼ぶのは誤りかもしれない。しかし「母なるもの」の役割は癒しや安らぎを与えるだけではない。

むしろ主人公のテーマ、課題が変わったことに着目すべきかもしれない。「大人対子ども」のときには、大人に反抗することによって、少年が持つ「純粹さ」を貫徹する姿が描かれていた。しかし「母なるもの対子ども」では、「純粹さ」とは別の「自立」がテーマとなっているように思える。「母なるもの」は子どもたちが自立するためのステップなのである。

大体どの作品も、最後は戦いが終わり、主人公は平和な日常生活へ帰っていく。最終回はそういう描かれ方である。そこには（精神的に）大人になった「子どもたちの姿がある。壮絶な戦いの後にしては、あまりにもあっけない終わり方である。しかしそこに作品



のテーマが凝縮されて描かれている。結局、「一人で生きていくこと」が長い戦いの末に主人公がたどり着いたものだったのである。

しかしファンは納得しない。主人公が平凡に生きていくことを許さない。少年は再び、三たび戦場へと駆り出される。テレビ放映とは別の「外伝」や「完結編」が作られる。また、ファンが勝手に話を作ってしまうこともある。

すでに周知のことかと思うが、アニメで描かれているのは、戦いとか恋愛とかではない。「自立」や「自己主張」をするために苦闘する姿、内面の葛藤である。少なくとも多くのファンはそういうものをアニメのなかに見ている。そう言うアニメを高く評価しているように思われるだろうが、最初にも述べたように、私は作品としてはあまり評価していない。悪く言えば「安っぽいメロドラマ」だと思う。「アニメなんて」と言われても仕方がない。しかし「安っぽいメロドラマ」からも得るものはある。それは高尚な作品から得るものよりも重要かもしれない。

(学習院大学)





子どもの本から

「いのち」ってなんだろう

仲 明子

『いのちの設計図』は、『お母さんが話してくれた生命の歴史』の第二巻です。このシリーズは、ビッグバン

ンで生まれた火の玉のかけら（クォーク）が、長い時間を経て、地球の海の中で生命となり（二・二巻）、進化して（三巻）、人間となる（四巻）までの壮大な自然のドラマを描き出しています。それは、擬人化された二つの小さい火の玉のかけら（クォーク）の物語

になっています。登場人物は、「クォーク5号」と「博士」の二人のクォークです。

著者は、生命科学の立場から「生命とは何か」を問いつけているサイエンスライターです。そして、「いのち」のもっている一番大切な性質は「自分とおなじものをつくること」ができる「ことだと言っています。

では、「いのち」はどのように同じものをつくるの

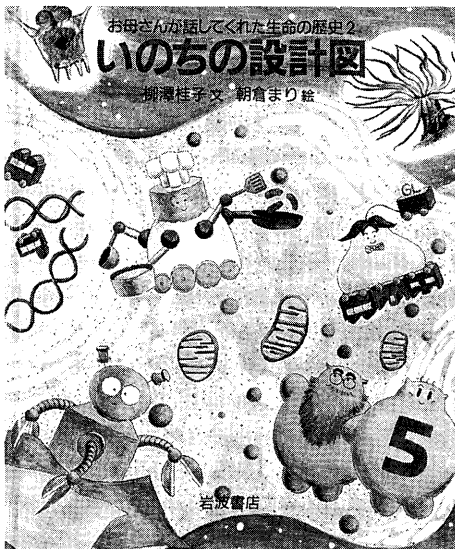
でしょうか。また、どのように受け継がれてきたのでしょうか。二巻ではそれらについて考えています。この本の始めにはクォーク5号と博士は地球の原始の海の中のアデニンという分子の中に入っています。

まず、自分と同じものをつくるのはDNAの働きによるものです。いのちは四種類の分子からできています。この分子は、A（アデニン）にはT（チミン）が、G（グアニン）にはC（シトシン）がちょうど鑄型にはめ込んだように互いに上下にぴったりはまり込む型をしています。ここに同じものを無限につくることができ、いのちのからくりがあります。

この四種類の分子がいくつもつながってできた大きな分子がDNAです。この本ではDNAを汽車に、四種類の分子を車両に見立てています。そして、その汽車にぴったりはまった逆立ちしている汽車も描かれています。この汽車が鑄型の役割をしている絵から、一本のDNAを写しとったもう一本のDNAができていくことがわかります。

つぎに、いのちは、タンパク質のつくりかたを書いたDNAによって受け継がれます。これを著者は「いのちの設計図」と呼んでいます。細胞はこれに従っていろいろなタンパク質をつくりまします。DNAは、三十

▼『お母さんが話してくれた生命の歴史2 いのちの設計図』
柳澤桂子・文／朝倉まり・絵 岩波書店 一九九三年



六億年前からの手紙と言えます。

いのちは地球の海に誕生してからこの、A、G、T、Cの四文字だけで書かれた長い長い手紙を受け継ぎながら進化してきました。

ところで、クォークはビッグバンから百五十億年生き続けて私たちの中にいるのです。私は、クォークという言葉をこの本で初めて知りました。DNAという言葉は知ってはいましたがここに書かれているような「いのちのからくり」については知りませんでした。

一九六〇年代に高校生だった私は、科学的知識を生物・化学・物理・天文などの別々の分野で学びました。今回、それらがクォークやDNAというキーワードによってつながり、百五十億年の宇宙の歴史と三十億年の生命の歴史が、そして、いま生きている私たちのからだの中で起こっている現象が一つになりました。

著者が米国のコロンビア大学で分子生物学の研究をしていたのが一九六〇年代でした。分子生物学が生ま

れたのは二十世紀の半ばになってからですから、クォークやDNAは、著者たちが「生命とは何か」を求め続けたこの五十年ほどの間に注目されるようになったのです。ある調査では、日本人の一般市民の八十二パーセントが、DNAを「知らない」と答えているといいます（立花隆『文芸春秋』二月号）。

では、子どもにとってはどうなのでしょう。この本を読んでいる傍らで見ていると、まず絵を見ながらページをめくって読み進んでいきます。そのつばやきを聞いていると、四種類の分子（各車両）の特徴や組み合わせなどをパズルやゲームをするような感覚で絵解きをしています。大人の私が、目を皿のようにしても、どの車両も同じに見えてしまうのとは大きく違います。子どもたちは、絵を先に見て、内容を知りたい部分は本文を読むのです。このシリーズが「小学五年生程度の読書力で楽しく読み進められる」と書かれているのもうなづけます。

著者が一般向けの科学書を書くようになって十年に

なるといいます。著者は子育てをしていた七年間専業主婦でした。その後、研究所で発生学の研究を始めました。そのきっかけは二度の出産の経験でした。実験材料を大腸菌から当時の日本では誰も手掛けていない哺乳類に変えたのです。その研究の半ばに病に倒れ、長い闘病生活の後に研究者として再起不能であることを知り、退職しました。そしてサイエンスライターになったのです。"せき止められた研究への情熱が「こんなおもしろいことをたくさんのひとつたえたい」という願望に変わっていった"と語っています。

著者は、三十年近い年月を原因のよくわからない病気とともに生きてきました。はじめは、めまい、吐き気、やがて、四肢の麻痺、嚔下困難なども伴い、次第に起きることもできなくなり、"できることは、キープボードをたたくことだけ"になってしまったのです。それらの著作では、それまでの研究者としての知見を基盤に、「生とは」「死とは」を考えています。それら

は、読むものに"生きる"とは何かを考えるように迫ってきます（『生と死が創るもの』、『癒されて生きる』など）。

子育てをしていると"いのち"について考えさせられることがどの時期にもあります。子どもがまだ小さかったころ、同年の友人がかまきりの頭と腹を左右の手にもって、ひっぱりました。かまきりは無残にも二分されました。私は、どんな言葉で"かまきりが生きている"ことを伝えられるのかわからずに、ただそこにいました。そしていま、思春期を迎えようとする子どもたちに、"かけがえないいのち"についてどう語ればいいのかためらっている、私がいいます。そんなとき、出会ったのがこの本です。"それぞれの人とって、自分というのは宇宙でたった一つなのです" "百五十億年の積み重ねが自分を生んだのです" ということを感じとってほしいから、この本を子どもたちの身近におこうと思います。

（舞々同人）

編 集 後 記

今月の「子どものいる暮らし」の記事には、「幼稚園の遠足に病気の妻のピンチヒッターで行った筆者」と娘のピアノの発表会のために仕事を休む若いお父さん」の二人の父親が出ています。

男性の書き手に、子どもとの暮らし振りやそのことを通してのご自身の変化を書いていただくとうと、このシリーズを始めて二年になります。この二年の間にも、男性の子育てへの参加の仕方に変化があったように思います。二人の父親にそれが現われているようです。

私は小児科の外来によく行きます

*

が、母親と二人で我が子連れれてくる父親は以前からいました。その後、一人で病気の子を連れて来る父親が増えました。最近では、先生の問診に、昨夜の様子、体温、食欲、下痢の様子など、きちんと答えている若い父親までいて、それにはびっくりさせられます。その父親は決してその場限りのピンチヒッターではないのです。

この春の、下の子の中学の入学式でも、平日にかかわらず多くの男性が出席していました。しかも、式だけでなくその後の保護者会にも、クラス委員を決める輪にも加わっていた方がクラスに数人ずついて、これにも驚きました。

父親の子育てへの参加の仕方が変わってきていることに気がつかれました。

(A)

幼 児 の 教 育

第九十八巻 第七号

(一九九九年七月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十一年七月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112 東京都文京区大塚二丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108 東京都港区三田五丁目

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三十五三九五五六二(営業)

☎〇三十五三九五五六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一〇二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

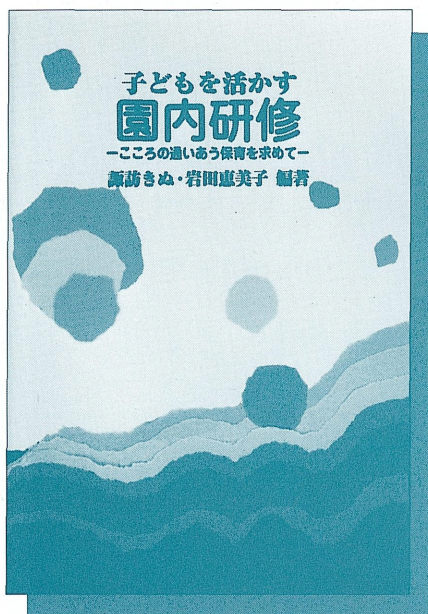
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもを活かす 園内研修

—こころの通いあう保育を求めて—

諏訪きぬ・岩田恵美子 編著

- 保育者一人ひとりが、その子のこだわりを受けとめ、その子のよさを引きだせるようになるために。
- 園内研修の輪の中で、子ども理解を深め、保育をあとづけ、保護者と共に確かめあうプロセスが生き生きとえがかれています。



【内容紹介】

目次より

- 第1章 新宿界限の子どもたち
- 第2章 ごねてこだわって自分を発揮する子どもたち
- 第3章 保育園っていいね 友だちがいっぱい
- 第4章 親が変わり保育園が変わる
- 第5章 よい保育条件を子どもたちに返そう
- 第6章 「積み木くずし」を繰り返して
- 第7章 これからの保育実践の課題と園内研修の意義

好評
発売中

A5判 192頁 定価：本体1,800円＋税

キンダーブックの
フレール館

子どもの「なぜ」に答える〈全4巻〉

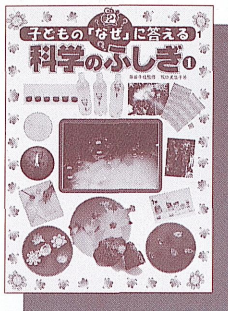
好評既刊本!!

子どもの好奇心は宇宙をものみこむほど広く大きく、大人は鋭い質問にたじたじする経験もさせられます。この好奇心をうけとめ、しっかりのばす手助けをしたいと願って生まれた、自然と科学の遊びシリーズ。

藤田千枝 監修 セット定価：本体9,200円+税

1. 科学のふしぎ①

坂口美佳子・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



水波、風、石、そして太陽の光などの自然現象のなかへ子どもをつれだし、充分にその現象を体験させる方法がていねいに書かれ、さらにはこの体験を科学的な考え方につなげる遊びや実験が紹介されています。

2. 科学のふしぎ②

佐藤善江・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



紙や、コップ、ペットボトルなど、身近にある材料を使って、楽しいおもちゃをつくりながら、空気、音、光、磁石などと仲良しになろう。気楽に学べ、新鮮な驚きがいっぱいの科学遊びを集めています。

3. 自然のふしぎ

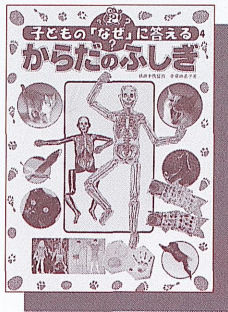
菅原由美子・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



お散歩や遠足で野外にと、そこは遊びの宝庫です。どこでも見られる草花やタネ、虫、カエルたちは、いつでも自然遊びの相手をつとめてくれます。そして、水族館や動物園なら、もっとすごい発見があるでしょう。

4. からだのふしぎ

赤藤由美子・著
B5変型判 120頁 定価：本体2,300円+税



動物や人間の「からだ」に関する遊びを、あつめました。匂いをかいて見えないものの正体をあてる遊びを、虫に鼻があるかな?という好奇心をそそる問いかけにつなげ最後には、がいごこの模型までつくってしまします。

キンダーブックの
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。